「足羽山」再訪

窪島誠一郎

還暦すぎまでこれといった大病もせずにこられた私だが、昨今身体のあちこちに不具合が生じはじめた。前立腺疾患や不眠症は老齢者につきものの宿痾だろうが、それに慢性の皮膚病、心臓病などが重なってはなはだ按配がわるい。それでも貧乏美術館主のかなしさ、現金収入の講演や原稿書きを断わるわけにはゆかず、相変らず全国あちこちを飛びあるく出稼ぎ生活なのである。

そんな一日、小林覚雄ご住職から「足羽山再訪」のお誘いがあった。一昨年寺内の一かくに、先年他界した父水上勉と私の「父子墓」を設けるという計画がもちあがり、ご住職と父の在所越前にあるK石材店に足羽山特産の「笏谷石」を見に出かけてから、いつのまにかもう一年以上がすぎている。

「そろそろ、本格モードに入りましょうよ」

電話口のご住職がそう急かされるのもムリはないのである。

住職が当面急ぎたいのは、一昨年目ぼしをつけた笏谷石のなかから、将来の私たちの墓に適した石を最終的に選別することと、その石を置くのにふさわしい台座のデザイン、碑面にきざむ文字の内容を決定すること等々で、ともかくもう一度足羽山のK石材店を訪ねてほしいというのだ。

もともと笏谷石を墓石の候補に推したのは小林住職だった。がんらい福井地方の地覆石や石段などに用いられていた笏谷石は、約一七〇〇万年前、火山活動によって噴出した火山灰や火山礫が固まってできた火山礫凝灰岩で、淡い青緑色の岩肌に特徴がある。難点といえば比較的軟質で風雨によわいところで、五十年もすると碑面の文字が溶解してしまう可能性もあるという。私はその「五十年も経ったら溶解する」という石の薄命ぶりが気に入って、そくざに笏谷石をわが「父子墓」に使うことをきめたのである。

「いいですねぇ、半世紀経って墓もろともこの世から消滅しちゃうなんて」

私がいうと

「いやいや、そのときにはちゃんと新しい墓石にかえて供養させていただきますから」

とご住職。

たしかにご住職にしてみれば、いかに笏谷石が軟質であろうと、みすみす墓石の溶解を許すわけにはゆかないのだろう。創建八百年をむかえる北信州きっての名刹井上浄運寺の沽券にかけて、私たちの「父子墓」を永代供養したいというのが希いなのだから。

そういえば、生前父親が「誠ちゃん、お寺さんとの付き合いもしょせん生きているうちのことや。仏さんになれば、自分の供養は自分でするもんやからな」。口グセのようにそういっていたのを思い出す。何しろ生涯を賭けて「差別戒名」や「仏教腐敗」を批判、坊さまの世界を眼のカタキにしてきた作家だから、今回の「父子墓」計画だって、父が生きていればどんな顔をしたものか。

ただ、それには私は私でいささかの反駁がある。墓はそこに眠る死者のものではなく、故人をしのぶ生者のもの。いわば私たち父子の墓づくりは、生前私たちに寄せてくれた世間のご交誼への返礼とでもいうべき営みだろう。もちろんそこには、父親人気にあやかりたい不肖の子の自己顕示もあるけれど、どうか父上、ここはひとつ浮き世の顔を立てて、といった気持ちなのだ。

さて、X月X日福井で落ち合った私と住職だったが、K石材店主人に案内された石切り場で絶品の笏谷石をみつけた。サイズといい色合いといい、私が描いていたイメージにピッタリの笏谷石である。

「五十年で溶解しますか?」

私がK主人に問うと

「大丈夫です。まちがいありませんから」

変な太鼓判をおしてくれる。

「そりゃ困りますよ。万一のことがあったら保証してもらいます」

ご住職は真剣な顔でいう。

いづれにしても、今回の「足羽山再訪」はまずまずの収穫だった。選別した笏谷石の納品時期、碑面の文字、台座のおおむねのデザインなどを決定して帰途につく。ようやく私たちの「墓づくり」が一歩前進して、心なしか小林住職の顔にも安堵の表情がうかんでいる。

ただし、念願の「父子墓」建立も、そこに入る私が息災であっての話で、私自身が建立前に「溶解」してしまったらシャレにもならぬ。これからはせいぜい養生につとめて、身体の元気を取りもどさねばと心に誓ったものだ。

（「信濃デッサン館」「無言館」館主・作家）